



2018 年 (平成 30 年)
2月号 (No. 873)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

北方3島(国後、択捉、色丹)訪問記(その1) 国後島

昨年6月と10月の2回、北方領土における共同経済活動に関する官民現地調査団(政府派遣)が、経済・人的交流促進を目的として現地を訪れた。この第2回調査団に、観光分野の民間プロジェクト専門家の一人として参加した黒川元副会長の報告を、「国後編」と「択捉・色丹編」の2回に分けてお届けする。

知床・羅臼岳(昭和46年夏)

釧岳での夏山定着合宿の後、縦走合宿として北海道・日高山脈を南から北へ抜け、大雪、利尻から知床まで、山岳部の先輩を訪ねて道内を巡ったことがある。羅臼岳にはそのとき登ったが、山頂からはるかクナシリ^{クナシリ}の爺爺岳(チャチャヌプリ)を望みながら、なぜ自分たちはそこに行くことができないのか、と悔しさを感じたことを

文と写真 黒川 恵^{さとし}

今でも鮮明に思い出すことがある。戦後、観光目的の渡航が事実上できなかった北方領土だが、戦前に北大山岳部をはじめとする先達たちが、多くの登山記録を残している北辺の山々には、手つかずの自然がそのまま残っている。その国後島の象徴でもある爺爺岳をもっと近くに望むことができると考えただけで、この官民調査団(団員54名)へ参加する私の訪問意義は、

目次

北方3島(国後、択捉、色丹)	
訪問記〈その1〉国後島	1
80年前の先人の偉業を訪ねて	
ナンダ・コートへ	4
小島島水に代わって「カスケードの宝石」	
ジャスタ山登山記	7
さんけん通信	8
登山者自動位置確認システム	
(MAPS®)の実証実験を開始	9
追悼 大久保春美さんとの思い出	10
活動報告 図書委員会	11
支部だより 越後支部	12
Climbing & Medicine	81
新入会員	15
図書受入報告	15
図書紹介	15
会務報告	17
ルーム日誌	17
会員異動	18
INFORMATION	18
編集後記	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10~20時
水・金……………13~20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10~18時

より高まったのである。
夜の根室の町で(10月25日)
北方領土問題を政治的に語るの
は、この調査団の場ではないと思
いながらも、旧島民やその関係の
方々を思えば、この北方領土問題
を少しは事前学習しなければ、と
付け焼き刃で書物に取り組んだ。
北大山岳部出身の知人から根室
の梅ヶ枝町の酒場を紹介してもら
い、国後島への出港前夜、そこで
色丹島^{シコタン}引き揚げ者二世の女性主
人と、その友人らと語り合った。
北方領土における海産物の豊か
さと、自由往来への渴望を知るに
つけ、旧島民と血縁の人たちが多
く暮らす、この根室を素通りして
はならないと痛感した。内地に住
む自分たちも、その渴望の一端を

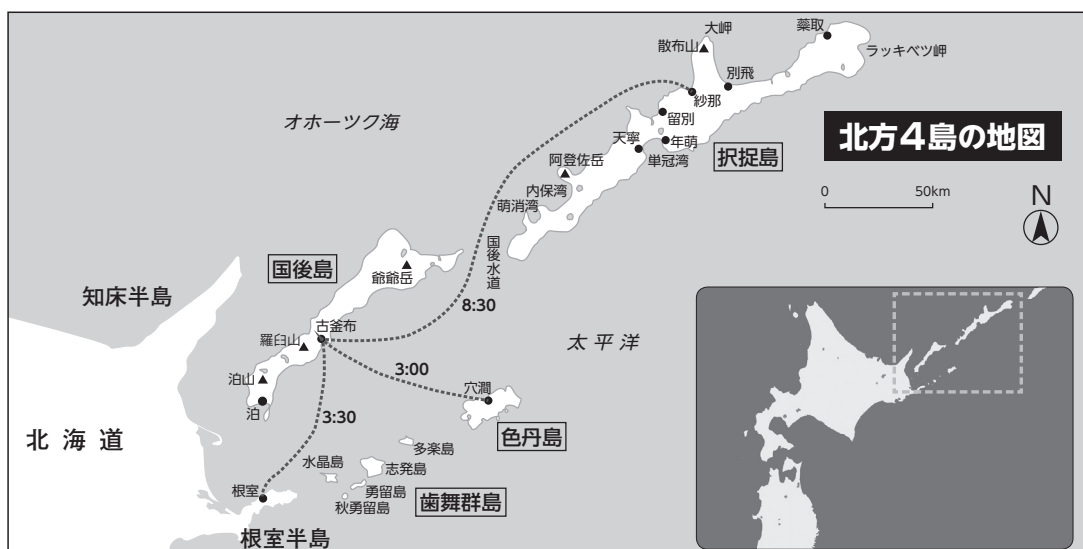


「えとぴりか号」船上から見た羅臼山(左)

共有しなければならぬ、と心底
から感じたのである。
「えとぴりか号」で出港(10月26日)
「えっ、この小さな船かい？」と根
室港で思わず叫んでしまったのが、
我々が乗るビザなし渡航専用船

「えとぴりか号」である。わずか1
100t余りのこの船は、国後島

室としても活用されたのである。



からの帰途、台風22号の影響をともに受けた荒波で、ときおり木の葉のように揺れながらも快適なキャビン生活を送らせてくれた。酔い止め薬（エスエス製薬アネロン）の効果は絶大で、このカプセル1つで丸一日を快適に過ごせたのだから病は気からなのかもしれない。

海水面下の6人部屋は、居心地の良い山小屋のようで、ゆったりしたサイズの2段階ベッドと小さなテーブルと収納棚があり、洗面所はお湯が出て、トイレはウォシュレット完備。海水から真水化された快適な浴室は、冷えた身体を芯から温めてくれた。大食堂は朝食と夕食会場でもあり、山小屋風料理が供され、大会議

爺爺岳遠望(10月27日)

島には大きなホテルや宿泊施設がないから、調査団は全員、船内泊である。前日夕刻に根室港を出港し、ベタ風の太平洋を北に進み、「えとぴりか号」が停泊した国後島の古釜布湾からは、日の出とともに北東方向に爺爺岳の二重コニーデの優美な山容が浮かび上がった。いずれも遠望だが、46年ぶりの再会だった。

「国後富士」とも称されるこの山は北方4島の最高峰で、標高1772m。海からでも山頂付近が白く冠雪していることが分かる。この訪問団は古釜布から南部の調査だから、国後島北端の最高峰を間近にすることができないのが残念だ。いずれ相まみえる日が来ると信じていた。

ちなみに爺爺岳の「チャチャ」とは、アイヌ語で年老いたおじいさんの意味で、島の厳父的存在として古から崇拝され、親しまれてきたものである。松浦武四郎の『蝦夷日誌』三編にも、「古来より云伝ふるニ、夷人も此山には上りたるものなしと。只言伝ふるニ上二大なる沼有て、是に山霊が住ると云伝えたり、実に嶋中の一大高山也」

とある。

安山岩や玄武岩から成る成層火山で、頂上部に直径約2kmのカルデラがあり、その中に中央火口丘がそびえているという。1812（文化9）年と1973（昭和48）年に大きな噴火があり、最近では1981（昭和56）年に水蒸気噴火があつて、根室測候所から観測されている。

日露友好の家

上陸前にロシア側役人が舢舨（はしげ）に乗って入域手続を済ませ、その舢舨に乗り換えて湾内を進む。陸上では多くのロシア人島民が出迎えてくれ、質素なバスで移動する。最



泊山付近のハイキング・コースのトレイル・ヘッド

初に訪れたのは「日本人とロシア人の友好の家」。俗称は「ムネオ・ハウス」であり、すべてが日本様式の建築ともいえる。日露両国相互によるビザなし交流団の宿泊施設としても活用され、島民の緊急避難施設でもある。

この友好の家の前の道路は完全舗装され、その先には羅臼山（882m）がたおやかな山容を見せている。

羅臼山は「眠れる森の美女」

「えとぴりか号」に戻る船は、日没



古釜布湾から遠望した爺爺岳

になると運航できないため、先を急がなければならぬ。羅臼山麓を巡り、泊まりのハイキング・コースを旨す。通訳が、「羅臼山は、眠れる森の美女という別名がある」と説明してくれた。たしかに北側から眺めるとそのように見えるが、今も箱根・大涌谷のように中腹から噴気が立ち昇っていることも眠れる美女に例えられているのではないか、と思ひましたのである。

羅臼山も安山岩やデイサイトの成層火山で、爺爺岳と同じくカルデラ内に溶岩ドームの中央火口丘



泊山のカルデラ湖(一菱内湖)と知床連山(左遠方)

を發達させている。1880(明治13)年の噴火記録があり、1900(明治33)年にも噴火があつたと思われる。そのお陰でこの山塊にはかつて硫黄鉾山があり、一大温泉地帯ともなつてゐる。

この山の登山はなかなか大変だろ。たぶん日高山脈のぶつといハイマツ漕ぎをしのぎ、上部は大きな火山岩がゴロゴロしているのではないだろうか。

泊山火口湖展望と冠雪の知床連山

いよいよ国後島で山を歩くのだ。

スキャーを喜ばせてくれるだろう。しかし、国後島の集落で登山道具屋を見かけることはなかった。心地良い秋風を感じながら登り着いたカルデラ湖展望台は、まるで箱根外輪山のハイキング・コースの一角のようだが、ここからはつきりと、白く輝く知床連山が見渡せるのであった。

*

次回(3月号)では、択捉島と色

✻

次回(3月号)では、
 択捉島と色えとろふ

丹島上陸をレポートする。択捉島では、オホーツク側の紗那の港に入港したら、間近で散布山（ちりつぶ 1582m）が出迎えてくれた。そこから6輪駆動車でアプローチして、さびすず 指白山（1125m）の麓に広がる温泉湧出地などを巡り、少し遅い錦秋を感じることができた。

色丹島は戦前、「東洋の箱庭」とも讃えられ、国立公園候補地ともなつた、自然豊かな土地で、枯れたヨモギの原っぱの丘陵を歩き、日本人墓地を訪ね、海浜景観の美しさに驚かされ、町では津波避難路の看板にも出会つたのである。

アルパインツアーサービス(株)会長
 〈参考文献〉『改訂 新日本山岳誌』
 (日本山岳会編著、ナカニシヤ出版)
 『日本活火山総覧』(気象庁)

REPORT

80年前の先人の偉業を訪ねてナンダ・コートへ

大蔵喜福

頂上まであと200m

昨年10月7日正午、アタック隊からC2にいた私に緊迫した連絡が入った。

「隊長……スノーバーでの確保ができません!」「雪が薄く、下の氷が硬くてスノーバーは効きません……」「もっと効きのいいアイス・スクリューは?……」

頂上直下、距離にして200m。傾斜約60度、積雪が少なく、50cmのスノーバーを横に埋めるのが精いっぱいだ。最後の安全確保ができない軟雪壁。アイス・スクリューも硬軟織り交ぜた粗目とツララの氷壁に頼れず、危険を顧みずの行動を慎む決断を迫られる。五分五分で登れないこともない。ただ、一度でも踏み外したら何人も引つ張り込む。ロープなしで攻めるか? それにも大きなリスクが……。重々しい不安が過ぎる。

決断までの逡巡が数十分。もう数日余裕があれば……。もつと良いパイプ・スクリューがあれば……、

もつと積雪があれば……。隊員の高度障害がなければ……。したらればの走馬燈である。しかし「何があれば?」の言葉に正当性はない。この状況下に至っては、何をしても同じである。「安全第一、残念だが退却……」チーム登山であればこそ、間違いない決断と思っている。

あと200mなのか、まだ200mなのか? 「残り200m」——最高到達点6750mが私たちの結果である。満足とは言わないが、本当のところ面白い登山だったというのが本音である。「高きが故に貴からず」の見本のような登山だった。

頂上に埋めた3つの旗を「8周年記念登山隊」が持ち帰ることは、次の機会へ先送りとなってしまうが、登れる感とやり切った感が心の中で膨らむ。なぜか悔しさは湧いてこない。北面の初登ルートとは比べくもない、道なき道の南面へのアプローチ、登山活動に

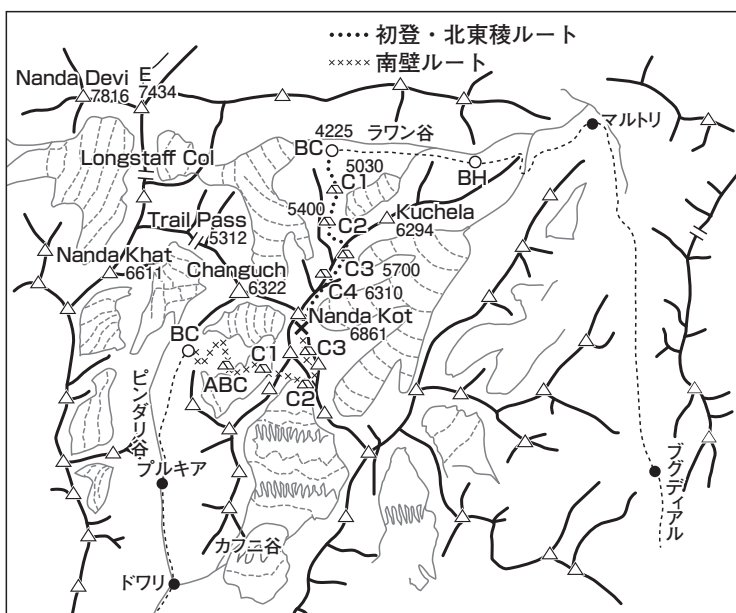
入ってからも複雑な地形を行く登高ルート、頂への700mに及ぶ最後の氷雪壁。地形、氷河、高度差、距離、何もかもが面白い冒険! というのが本音である。少数でまた近々……、「再登!」が頭を過ぎる。

初登ルートは不許可、南面へ

ナンダ・コート

は81年前の1936(昭和11)年10

月、立教大学山岳部OB堀田彌一を隊長に、院生・山縣一雄、現役・湯浅巖、濱野正雄と大毎・東日新聞特派員・竹節作太の計5名とアン・ツェリン・シエルパが、日本初のヒマラヤ登山に成功した「聖なる山」である。当時は二・二六事件が起こり、日中戦争から第二次世界大戦へと突き進むきな臭い世相。そんな時代の海外登山である。どうして彼らだけが実行できたの



だろう? 私は彼らの登山思想とその行動が知れたかった。

昭和初期の立教大学山岳部は、老舗大学山岳部から周回遅れのレベルだった。だが、堀田のリーダーシップによって、数年でトップに躍り出る。さらにヒマラヤへの思いは、1929年に実践されたパウル・バウアー率いるババリア隊カンチェンジュンガ登山の報告書に導かれる。経費が事細かく記



ナンダ・コト南壁正面。頂上直下の雪壁が700mに及ぶ滑り台

載され、(当時の金額で)2万円で
行ける……、大きな刺激であった。
数年にわたるインド・ヒマラヤの
情報収集と調査研究、ピッケルや
テントなど装備考案と製作依頼、
費用捻出など、周到な準備に取り
組む。

同行の竹節記者は初めて回す映
写機で、世界初のフルサイズ35mm
の映像記録を撮った。そのほか登
山記、新聞記事、写真集など隊員
たちの生きざまが残る。その後の
登山界に永続すべき、最良のテキ

スト・ブックとして今も活きるも
のだ。そのフィルムとテントの発
見に自らが関わることで、より一
層彼らに親近感が湧いた。

このナンダ・コトに光を当て、
世の若者たちに知らしめたいとい
う思いが登山隊結成の動機であり、
再登頂へ駆り立てた端緒であった。
同じ人数、同じ時期、同じルートで、
追体験をしたいと思った。しかし、
インドの国内事情により当時と同
じルートを登ることはできなかつ
た。代りに南面が許可された。

南面が注目され出したのは近年
になってからで、偵察などで入っ
た登山家もいると聞くと、正式な
隊としては1995年秋のイギリス、
2002年のインド隊に続き
我々が3隊目だ。初登はイギリス
隊で、不安定な大雪壁に一度は押
し戻されるが、4日間降り続いた
雪で良好なコンディションを得、
頂上を脚下にした。第2登はまだ
ない。

ルートは異なるが、タイムトン
ネルを遡って、その時代に生きた
先人たちの息吹を感じてみた
い。そして、頂上に証として埋め
た3つの旗と友情のタルチョを、
なんとしても探し出したいと思っ

た。「物言わぬ物証が、物言う物証
に変わる」。「行こう!」と決意し
た。2016年10月5日、初登か
ら80年目の登頂日であった。

登山期間はわずか2週間

アプローチは、より奥地まで車
が使えたのは嬉しいことだった。
1日分が短縮できたと喜んだのも
束の間、その先に想定以上の困難
が待ち受けていた。数年前の豪雨
被害の修復がまだで夏道が使
えず、橋がないまま河原の冬道に
キャラバンを進める羽目となる。
モンスーン時に増水する谷筋に安
全はない。雨の中、仕方なく無理
やりの高巻きが数時間続く。高度
差も100m余りの上り下りを1
日に数回である。

大変なのはポーター。30kg以上
の荷物を肩に草付の泥壁、それも
傾斜の強い、恐ろしい崖を行かね
ばならない。履いているのはサン
ダル? さすがに途中であきらめ
る者も出た。安全地帯で待ってい
る方がまだ安心、事が起きてから
では遅過ぎる。幸いこのひどい状
況は丸一日だけで済み、何事も起
きず皆無事だった。

ただ、ザンザン降りの豪雨でさ

らなる橋が流され、3日も停滞。そ
の後、1日で橋は架かったものの、
荷物がすべてそろうのにさらに4
日間、BCで待つこととなった。キ
ャラバンは正味2日半だが、登山
期間18日間という窮屈な許可条件
下では、停滞は大打撃である。登
山活動は正味2週間に減り、アタ
ックは1回のみとならざるを得な
い状況に変わった。これらは想定
内であったが、計画時にもう1週
間予定を延ばす申請は可能であり、
じっくりと攻めることはできたと
思うが、現場での状況や天候変化
による登攀のリスクは変わらない
と判断し、延長をしなかった。

BCには9月25日午後に着く。
3816mと低く、頂上まで高度
差3000m以上ある。山塊の基
部氷河に出るまでは、まず山腹道
を巻き上がって草原に出て、9月
26日、ABC(4350m)を設置。
次にモレーンの崩壊地を下り、岩
屑のガレを登り、雪線(4450
m)に出て岩と雪のミックス地帯
を行き、氷河帯に上がり29日、C
1(4900m)を設置。30日、先
行のシェルパによってC2予定地
に隊荷をデポ。10月1、2日は全
員BCに降りて休養し、3日より



ナンダ・コート南壁を登る

アタック態勢に移る。

10月3日、隊長と登山隊員、撮影隊員の7名でC1入り。翌4日、山田が高度障害で下山するも、残り6名で大小のセラックとクレバスに注意してランペを越え、急な雪壁を越えてカフニ・コル(5350m)に出る。さらに1000mを下降し、中段にある内院氷河(ミドル・プラトール)に移る。氷河を1km余り横断し、C2(5350m)を設置する。雪崩と崩壊に遭わないよう神経を集中した1日だった。5日、C3予定地に荷揚げ。氷河からランペを登って岩屑のリッジに移り、ズリズリと岩を蹴散らし

ての登攀後、スノーキャップを越えて上部内院氷河(アッパ・プラトール)に出る。前面の衛星峰ナンダ・バナール峰とすぐ後ろのナンダ・カニ峰の間をC3(5900m)とし、荷物をデポする。30代のシェルパ、ニマとラクパは強力パワーで、ありがたい助っ人。

翌6日、鈴木、門谷、石井、中島の若手陣とシェルパの6名でC3を設置する。1回きりのアタック・タクティクスには、足並みがそろった若手で構成するパーティの力が必要と、ロートルの隊長大蔵と堀がC2に残り、バックアツプに回ることにする。隊とBCの無線連絡は不可能で、この形を私は最初から計画に入れておいた。堀はしきりに「もう数日時間があれば、俺だって」と愚痴る。彼は年齢を考えた舌を巻く体力の持ち主である。荷揚げも我々がする必要がある、無理はできない。4隊員とシェルパに登頂を託す。日程を短縮するため、テントほか装備の一切を持ち上げるカプセル・スタイルでのアタックとなる。

10月7日早朝、残り950m余りの高度差を6名が一気にアタックしたが、積雪の量が少なく、お

「山の日」歳事記 二月号

2月23日は静岡・山梨両県の「富士山の日」

富士山を擁する静岡県と山梨県は2月23日を「富士山の日」と定めている。日にちの特定はフジサンの語呂合わせだ。富士山を大切な宝と誇り、後世に引き継ぐことを銘記する日である。

静岡県の場合、教育委員会の呼び掛けで、すべての県立高校と一部地域の公立小・中学校

がお休みになっている。山と向き合う一日だ。一方、山梨県には20年も前から「やまなし山の日」があり、地域から発信されたそのパワーは、国民の祝日「山の日」制定につながった。2019年8月の第4回「山の日」全国大会の開催地は、山梨県である。

(寿)

まけに軟雪、6000m以上でツラとモナカ状雪面という状況に勝てず、アタック隊全員が最高到達点6750mでの退却となった。アタック隊は、その日はC3に泊まった。8日、C2の隊長らと一緒に、すべての装備とともにBCまで一気に下山。9日を下山準備にあて、10日にBCを後にする。

〈登山隊メンバー〉*印は撮影と登山隊員を兼ねる。

隊長…大蔵喜福(66歳)

隊員…堀達憲(63歳)、鈴木拓馬(24歳)、山田祐士(39歳)、*門

谷優(34歳)、*石井邦彦(38歳)、*中島健郎(34歳) 撮影…古賀志信(30歳)、林宏(39歳)

〈注〉山名および標高は『コンサイス外国山名辞典』(三省堂刊)による。なお、インドは周辺国との国境問題を理由に、一般には5万分の1地形図は全く入手不可、登山財団にすら1枚もない。さらに衛星通信は全く許可されない。

(ナンダ・コート初登頂80周年記念登山隊隊長)

REPORT

小島烏水に代わって「カスケードの宝石」
シヤスタ山登山記

アメリカ西部カスケード山脈のシヤスタ山(4322m)。日本山岳会初代会長・小島烏水が1918(大正7)年9月11日、邦人として初めて挑みながら時間切れで登頂をあきらめた無念の山だ。それから1世紀、四国支部の8人が、支部手作りの海外初登山として2017年6月23、24日、烏水に代わって登った。

6月23日、登山口(2109m)まで車で移動。午前8時47分に発ち、モミ林がまばらになるころ、大雪溪に踏み出す。西に避難小屋が立つホース・キャンプ(2370m)の近くだ。小屋は烏水が馬で訪れた4年後に建った。

快晴、無風、日差しが痛いほど。傾斜15〜30度の雪面を快調に登る。その日の幕営地ヘレン・レイク(3240m)に楽に着くと思つたが甘かった。独立した火山らしく大きな山だ。烏水の記述どおり「白馬岳の比ではない。長々しい」

8人がキャンプ地に着いたのは

約7時間後。2ヶ所のならされた適地にテントを張る。

24日朝は午前3時40分出発。はるか頭上に星々に似た灯が瞬く。通常、岩峰のサム・ロックを目指すが、雪の状態が悪いのか、先行パーティのすべてが西の鞍部へと向かっている。

御来光が差すと巨大な山影が麓に広がり、自然美が胸に染みだ。火口壁の胸突き八丁に至ると斜度40度。アイゼンの爪をしっかりと立



1日目、「白馬岳の比ではない」大雪溪を登る

てる。8人の疲れ具合はまちまちで離れぎみになるが、マイペースを守る判断を最善とした。出発から3時間20分後、サム・ロック、レッド・バンクス、ミズリー・ヒル、頂上を結ぶ主稜に出た。元気な5人と、軽い高度障害に悩む3人とに隊を分けた。烏水も涙をのんだ付近だった。

あたりの岩はすべて赤茶色。この成層火山は過去1万年に、平均800年間隔で噴火。直近は232年前に起こったという。5人は青空の下、爽快な気分でごんごん高度を稼ぎ前進。ただ、左に転んだらテントサイトまで一気に滑るし、右下は断崖。



シヤスタ山山頂に立った5人の記念撮影

支峰シヤステイナ(3790m)が見えると、平原状のミズリー・ヒル。今まで見えなかった天辺がようやく姿を現わし「うわっ、まだここを通るのか」と皆、顔を見合わせた。出発して6時間後、氷河の先端が四方に見え、かすかに硫黄臭が漂ってきた。階段状の岩稜を越すと待ちに待ったピーク。眺望は八方に発達し、名も知らぬ銀嶺が点々とそびえていた。この光景こそ、烏水が憧れたものに違いない。「カスケードの宝石」―シヤスタ山は富士山のように優美さと伝説を具えており、地元住民はそう呼ぶ。烏水は著作『氷河と万年雪の山』にこう紹介している。

「米国で好きな山はと聞かれると、一番先に頭に浮かぶのがシヤスタ山である……最も多く心を惹かれる山である」と

8人はテントを撤収し、午後5時半に無事、登山口に帰り着いた。登った5人と勇気を奮って断念した3人も笑って振り返り、寶石に値する山に感謝して、わずか2日間の米国の山旅は幕を閉じた。

【参加者】尾野益大、今井順一、小林京子、斎藤正治、十河利雄、岩井賢助、森山宏昭、桑原豊秀

さんけん通信

冬の山研生活体験記

2017年4月の開所、10月の閉所作業を経て、山研に愛着を感じようになつていった私の中で、「冬の山研を訪ねてみたい」という気持ちが始つていた。このたび、山研委員会の先輩方のお力添えとご厚意により、冬の山研視察と登山講習の機会に恵まれ、願いがかなつた。

冬期は、水を使うことができないことは以前から聞いていたが、今回は入山前日から、倒木により上高地一帯が停電しているという連絡を安井担当理事よりいただいた。果たして、水と電気のない冬の山研生活とはいかに……。

山研委員の古野淳さん（リーダー）、鈴木絵美子さん（東海支部）、そして私の3名の冬期山研視察と登山講習（机上・蝶ヶ岳）の模様をご紹介します。

12月28日 入山、山研へ

前夜に東京を出発し、雪をかき分けやっと山研にたどり着いた。地下の冬期入り口から「ただい

和田 薫

ま〜」と中に入るが、寒い。そして暗い。もしかしたら電気が復旧しているかもしれない、と祈るような気持ちでスイッチを入れたが、電気はつかない。ということは、薪ストーブで暖をとるしかないのだ。温度計はマイナス10度を示していた。また、窓が雨戸で閉ざされているため、昼でも薄暗い。

ともかくにも早く暖まりたいと、手分けしてストーブに薪をくべて、ガスでお湯を沸かす。閉所の際に汲み置きしていた水は、見事に凍り付いていた。薪ストーブだけでは山研全体を暖めることはとてもできず、吐く息はまだ白い。デイズニー映画『アナと雪の女王』の凍ったお城のようだなあ、と思

いながらお茶を飲んだ。ひと息つくと、次は水汲みだ。冬の山研生活は忙しい。2泊分の生活用水を近くの善六沢に汲みに行く。20ℓのタンク2つをソリに乗せてえつちらおつちら。まるで平成の（おばさん）「おしん」だが、ソリのおかげで思ったよりも苦労は

ない。むしろ、冬の上高地を歩く喜びと、普段できない経験に、気分が高揚していた。

昼食後は、古野さんによる講習。私は今回が初めての積雪期テント泊だったので、とても楽しみにしていた。冬のテント生活技術や、ロープワークなど盛りだくさんの内容を薄暗い部屋で教えていただき、真剣に学んだ。ただ、だんだん日が沈んできており、夜になったらどうなっちゃうのかしら、と気分も沈む。

と、そのときだ。中部電力の方が「電気が復旧しました」と山研を訪ねてくださったのだ。スイッチを入れると……照明がついた！ 石油ストーブがついた！ 私の頭の中では、「レリゴー、レリゴー」が鳴り響いた。これで暖かく明るい夜が過ごせる。上高地で行なわれていた工事の関係もあると思うが、電気の復旧にご尽力くださった電力会社の方に、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。ありがとうございます。

すっかり明るくなった台所で心機一転、夕食の支度を始めた。メニューはトマト鍋。楽しい食事をして、節水に節水を重ねて使った



雪の中に静まり返る山研

食器を洗い、「明日は晴れますように！」とシュラフに入った。

12月29〜30日 いざ蝶ヶ岳へ……

と思つたら、スペースが足りなくなつてしまった。私たちの長堀尾根での奮闘ぶりについては、ぜひ山研運営委員会の「さんけんブログ」をご覧ください。

<http://www.jac.or.jp/>

info/iinkai/sanken/

index.htm

（お知らせ）山研は4月21・22日に開所作業を行ない、25日から利用可能です。4月27日（金）は上高地の開山祭が行なわれます。

（山研運営委員）

さんけんブログ

検索

TOPICS

登山者自動位置確認システム(MAPS®)の実証実験を開始

手塚友恵

一般財団法人全国山の日協議会
 が取り組んでいる事業のなかで、
 「登山の安全と防災」の分野では、
 昨年より携帯電話ネットワークを
 活用した登山者自動位置確認シス
 テム(英語名: Mountain Automatic
 Positioning System、略称: MAPS
 ®)の実証実験を開始した。実
 験地は、登山者の往来数を鑑み、ま
 た地元の自治体と協議し、まずは
 浅間山山域(長野県)、那須岳山域
 (栃木県)、富士山(静岡県)で行な
 うこととした。

MAPS®の登山者位置確認は、
 次の(1)～(3)の過程を経て行なわれる。
 (1)情報の収集

登山道標識(道標)に組み込まれ
 たモジュール部(以下、スマート山
 岳道標という)、または既設登山道
 標識に取り付けられたモジュール
 と、登山者が携行する「コンパス」
 アプリ(*1)がインストールされ
 たスマートフォンとの間で、道標
 IDと登山者IDがBluetoothウ
 ー通信によって照合され、当該登

山者の道標通過情報が、アプリと
 モジュール双方のメモリに記録さ
 れる。

*1「コンパス」は、公益社団法
 人日本山岳ガイド協会が運営する
 オンライン登山届システム。

(2)情報の集積

さらに当該登山者のスマートフ
 オンのメモリには、過去の特定期
 間にスマート山岳道標(およびモ
 ジュールの取り付けられた既存の
 道標)を通過した登山者ID情報
 も記録され、それらデータが当該
 登山者によってキャリングされる。
 登山者が携帯電話通信圏内に入っ
 た時点で、それらの通過情報のID
 データは「コンパス」のサーバー
 にアップロードされる。

(3)情報の活用

これにより、仮にスマート山岳
 道標が携帯電話通信網の圏内・圏
 外のいずれに所在していたとして
 も、「コンパス」のサーバーにアッ
 プロードされたデータを解析する
 ことによって、登山者らの移動過

程のトレースが可能となり、万一、
 登山者らが行方不明状態に陥った
 場合(登山届に記された緊急連絡
 先から、下山予定時刻を過ぎても
 下山が確認できていないことの通
 報によって事態が発覚した場合)
 でも、登山者IDと道標IDから
 最終通過地点を特定することがで
 き、かつ登山届の記載情報(登山計
 画)とも照合することで、その搜索
 の範囲を絞り込むことができる。

*

今回の実証実験は、MAPS®
 の根幹的機能である①登山者のス
 マートフォンと道標のモジュール
 の双方向通信機能、②登山者がキ
 ャリングした過去の通過情報のサ
 ーバーへのアップロード機能の検
 証であり、これら2つの機能にハ
 ードウェア的、ソフトウェア的に
 不具合がないかを検証することを
 目的に実施したものである。

なお、本実証実験については、一
 般財団法人全国山の日協議会が主
 管者となり、公益財団法人安藤ス
 ポーツ・食文化振興財団が資金的
 支援を、インフカム株式会社が技
 術的支援をそれぞれ担い、三者協
 働で実施されたものである。

今回の実証実験は無積雪期に実

施されたが、現時点ではスマート
 フォンのアプリケーションとモジ
 ュール部の機能障害は確認されて
 おらず、また、通過情報のサーバー
 へのアップロードについて問題点
 は見られなかったことから、今後、
 ハードウェアの観点からは、寒冷
 環境下でのモジュールの耐久性、
 バッテリーの消耗状況などを、ま
 た、ソフトウェアの観点からはさら
 にユーザーが扱いやすいインター
 フェイスの構築などにも注視しな
 がら、本システムの社会的評価も
 含めて検証作業を継続していく予
 定である。

2018年の第3回「山の日」記
 念全国大会の開催地は、鳥取県米
 子市と大山町である。社会的な注
 目を集める催事と連携することで、
 登山届提出の啓発も併せて、大山
 山域でもこの実証実験を展開する
 準備を進めている。

(全国山の日協議会事務局長)



那須連峰・茶臼岳山頂の道標



大久保 春美 (おおくぼ・はるみ)

会員番号7249

1949年 東京都八王子市に生まれる。
 1971年 東京女子体育大学を卒業、同大学山岳部OG。同年日本山岳会入会、紹介者は川上忠義、吉澤一郎両氏。
 1976年 第2回日印合同女子ヒマラヤ登山隊に参加。隊はカメット(7756m)の7400mまで到達後、アビ・ガミン(7355m)に登頂。
 1980年 日本山岳会ガルワール・ヒマラヤ女子登山隊としてケダルナート・ドーム(6831m)登山に参加。
 2008年 北京パラリンピック日本選手団長。
 2010年 広州アジアパラ競技大会日本選手団長。ほか日本山岳会副会長、同埼玉支部長、日本障がい者スポーツ協会理事、富士見市教育委員などを務める。

1976年7月、アフガニスタン中央部にある「砂漠の真珠」と呼ばれるバンデ・アミール湖にいたメンバーは春美ちゃん(清水春美、結婚後大久保)、いっちゃん(市村洋子、現姓前田)、小原俊さんと私、そして妻の雅代の5人だった。バンデ・アミール湖は木一本ない砂漠に囲まれた、青く透明な水を満々とたたえる不思議な湖である。何人かの現地の人たちが湖畔

大久保春美さんの想い出

梶 正彦

にある粗末な小屋掛けにいるだけで、この雄大で神秘的な景色を我々5人で独占していた。

「バンデ・アミールに行こう」と誰が言い出したのか、40年を超えた今となつては思い出せない。ナンド・デビィを終えた小原さんと私、デリーでジョインした雅代の3人は夜行列車でデリーを出発。パキスタンの国境を人力車で越え、バスを乗り継いでカーブルまで来た。カメットを終えた春美ちゃん、JACルーム事務局勤務のいっちゃん、デリーから空路カーブル入

追

OBITUARY

悼

りして合流、バーミヤン經由ここまでたどり着いたのだった。帰国後、我が家の隣のアパートに引っ越してきた春美ちゃんが定職を得るまでの時期、旅行やスキーを一緒に楽しんだ。

2004年アテネ・パラリンピックの盲人マラソン金メダリスト高橋勇市夫妻が、「練習と美味しいもの食べさせてください」と我が家に来て来たとき、「友人が北京パラリンピックの団長だった」と話す。「えつ、大久保さんを知っているんですか。彼女は偉い人だから、僕のこと覚えてないと思います」と言う。マラソン界のレジェンド高橋勇市がそこまで言うかと驚いた。電話での2人の会話を聞いていると、彼女は2008年北京大会団長、2010年広州アジア・パラリンピック団長、日本障がい者スポーツ協会技術委員長など務め、障がい者スポーツ界の著名人であることを知る。山仲間が、山の外の世界でこれだけ活躍していることを誇らしく思った。ナンド・デビィのメンバーで始めたスキーの集まりに、その後80年チョモランマ、84年カンチェンジュンガのメンバーにも加わった。

スキーの上手な大久保さんは、当初から参加していた。昨年3月の集まりには、「腰痛のため不参加」の連絡があった。5月の検診で癌が見つかり、その場でステージ4Bと診断される。

その後の覚悟を決めたであろう彼女の生き方は立派だった。辛い癌治療と折り合いを付けながら、7月には3度目のスペイン巡礼の旅、10月には愛媛国体に参加する。「正月を迎えられるかどうか」の連絡を受け、12月中旬、終末医療専門の病院に彼女を見舞ったときは、抗癌剤投与はやめており、腸閉塞を発症していた。苦痛と不安に向き合う末期の症状を想像して訪ねたが、彼女はモルヒネ入りリッゲルをザックに入れて背負い、病院内を歩き、楽しく話し、よく笑った1時間半だった。

最後にやりたいのは、富士山を間近で見る、カレーを食べる、家族に食事を作ること、と言う。これを聞いて、山が好きで、インドでの登山を思い出す、そして家族思いの彼女らしい願望だなと感動した。春美ちゃん、行動力溢れた貴女のことを忘れないよ。貴女は我々の誇りです。

図書委員会

第43回山岳史懇談会

「白瀬南極探検隊の業績と航海」

昨年11月17日に渡辺興亜会員（極地研究所名誉教授）を招いて、我が国の南極探検のパイオニア・白瀬矗と南極大陸までの苦難に満ちた航海を成し遂げた野村直吉船



講演する渡辺興亜会員

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

長の活躍ぶりを、本邦初と言われる記録映画を軸にして話してもらった。

まず、広大な南極大陸の成立と特徴、南極探検と観測の歴史やその重要性、我が国の南極研究の成果など興味深い話を語っていただきながら、新編ドキュメンタリー画像を観ながら当時の南極探検の様子を解説してもらった。左記に講演要旨をまとめていただいた。

100年前に撮影された白瀬南極探検隊記録 渡辺興亜

明治43年11月30日に日本を発った白瀬南極探検隊はニュージーランドに立ち寄った後、ロス海に入る。南極はすでに初冬に入っており、ロス海入り口のコールマン島付近で、野村直吉船長の英断で北に進路を変え、辛うじて海水に閉じ込められることを免れた。シドニーに戻った白瀬隊は再挙を期す

べく滞在し、日本に資金および物資の調達を依頼した。探検後援会は第1次航海の実情に鑑み、探検の目的を当初の南極点到達（少なくとも建前上の）から学術調査に方向転換させ、その一環として当時ようやく実用に近付いていた活動写真による南極自然の撮影を目論んだのである。100年前に南極でドキュメンタリー映像を撮るということは、当時としてはまさに時代の先端をゆく企画であったに違いない。

大隈重信・探検隊後援会長に頼まれ、田泉技師を南極に送り込んだのはM・パター商会（1912年に日活となる）社長・梅谷庄吉である。彼は辛亥革命の中心人物となる孫文を支援していた人でもある。白瀬南極探検隊は田泉技師撮影の約60分の記録映像を残している。実際にはこの倍のフィルムが撮影されたそうだが、南極からの持ち帰り時に二通りの保存法を試み、半分のみが辛うじて残された。

撮影は英国製のワーウィック（ツアイス・テッサー50mm f3.5レンズ付き）という木製箱形の映写機で行なわれた。撮影機は三脚を含めて40kg近くあり、数人掛かり

の作業であった。4000ft用意したイーストマン・コダックのフィルム感度はISO 10程度。フィルム200ftを装填し、送りハンドルを左手で回し（8コマ/秒）、絞りは右手で操作するという仕組みである。ファインダーの窓は小さく、白一色の南極では被写体の捕捉、焦点合わせに苦労した。

100年前に撮影された映像の質は現在の映像とは比べようもない。撮影機材の性能、撮影操作の困難さという制約条件を超えて残された映像は、まさに貴重な南極探検資料となった。しかし、残された撮影映像の被写体は限られたもので、そのまま編集すればドキュメンタリーとして組み立てられるわけではない。撮影機を据え、動く被写体、ペンギンの行進を延々と撮るといった映像が多いのである。映像ドキュメンタリーを制作するに当たっては、探検隊の撮影映像、探検隊報告『南極記』中の写真画像、描写絵画を中心に、すべて実物のみを素材とし、人工的な映像、画像はいつさい用いないということを基本方針とした。

映像は航海中の船内、船外風景、鯨湾定着水上の行動、棚氷の荷揚

げ作業、エドワードⅦ世ランド沿いの海水上行動が主なものである。それらの画像をつなぎ合わせていく上で、実写による鮮明なロス海の海洋、海水状況が分かる画像が必要であった。こうした南極自然に関する映像は100年前と変わっていないので、2004、5年にロス海で海洋生物調査を行なった水産庁海洋観測船「開洋丸」が撮影した映像を使わせていただいた（倉持正夫、永延幹夫氏の協力）。

また、白瀬南極探検隊が第1次航海で初めて目にした南ビクトリア山脈の山容は探検隊員、船員にとって、おそらく最大の感動を覚えた最初の南極大陸風景であったに違いあるまい。そうした思いでその映像を探していたところ、これも「開洋丸」の撮影映像から見つかり、ドキュメンタリーに加えることができた。これにより南極海航海という臨場感をさらに高めることができた。

2011年にドキュメンタリー映像『南極探検隊の記録』を試作（構成担当＝渡辺、映像編集＝斎藤茂男）し、関係者に披露したところ予想以上の好評を得たので、さらに資料収集に努め、2012年3

月、東京で開催した白瀬探検隊100周年記念国際講演会で最終完成版を公開した。

南極探検船「開南丸」の野村船長が記された『航海記』も記念事業の一環として刊行（野村直吉船長航海記）2012年、成山堂）することができ、今回制作したドキュメ

支部

だより



全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

越後支部

海外登山講演会報告

10月28日に新潟県山岳協会70周年事業の一環として、海外登山講演会を新潟市中央区万代市民会館で開催し、175名の参加者で盛会であった。新潟県山岳協会主催であるが、日本山岳会越後支部共催で実施した。昨年は日本山岳会越後支部（遠藤家之進正和支部長）が70周年を迎え、今年は新潟県山岳協会（森庄一会長）が70周年を迎

ンタリー映像とともに、白瀬南極探検隊の新しい資料となっている。渡辺氏からDVD『白瀬南極探検隊の記録 日本最初のドキュメンタリー映像』を寄贈いただいた。出席者36名（うち会員外7名）

（松澤節夫）

えた。いずれも故藤島玄氏が創設に尽力された関係で、従来から越後支部と新潟県山岳協会は一体的で良好な関係を構築してきている。本講演会開催に当たっても、両者の密接な協力と支援をいただいたことに感謝したい。

この企画主旨は、海外登山に興味を持っている若手メンバーを発掘し、海外登山を実現するためのアドバランを掲げることである。新潟県のヒマラヤ登山はどちらかと言えば後進県であり、意欲ある

若手登山者が県山岳協会や越後支部の門戸をたたいて欲しいと考えていた。当初はヒマラヤの地域研究会を立ち上げるつもりであったが、「ヒマラヤ登山研究会」と漠然と銘打っても興味を持った参加者がどれだけ集まるか不安であった。まず初めに、ヒマラヤ経験豊富な著名登山家から入門的な話を聞くこととし、来年度からヒマラヤの地域研究を進めていきたいと考えている。会員の高齢化に悩む越後支部や新潟県山岳協会に、若手会員を取り込むための起爆剤とし、今後の活性化対策に結び付けたいと考えている。

講師として、日本山岳会の重廣恒夫副会長と国際認定山岳医・医学博士である橋本しをり会員にお願いした。

講演Ⅰは、重廣副会長より「重廣恒夫のヒマラヤ登山塾」ヒマラヤ登山13回の経験から」と題して、ヒマラヤ登山の魅力についてお話ししていただいた。過去13回のヒマラヤ登山において、特に1977年カラコルムのK2（8611m）の第2登と日本人として初登頂、1980年チベット側からチョモランマ（8848m）北壁の初登頂



ヒマラヤ登山を熱く語る重廣恒夫講師

を成し遂げた輝かしい登山歴を持つ。1973年から2016年までに経験したヒマラヤ登山について、100枚以上のスライドを上映しながら説明していただいた。ヒマラヤの8000m峰は、初登頂されてから50年以上が過ぎており、それ以降も主要なバリエーション・ルートからの登頂も数々報告されてきている。しかし、ヒマラヤにはまだまだ6000〜7000m級の未踏峰がたくさん存在し、探検的要素の登山を追求することができると力説された。

日本の登山者人口は、800万人とも1000万人とも言われており、登山ブームが再来してきて

いる。一方で商業的登山も増えており、誰でも気軽に登山を楽しめる時代になってきたが、登山の大衆化が進むことにより遭難などの二次災害も増えていることを強く警告された。あくまでも登山者は、自分で行きたい山を選び自分で計画を立てることにより、自己責任で山に臨んでもらいたい。一方、登山客とは、登山計画をガイド任せで、ガイドの指示でしか行動できず、いざというときの自己対応ができず、問題を起こす事例が多い。山登りは「登山客ではなく、登山者であれ」ということを強調されていた。

講演Ⅱは、橋本しをりさんより「ヒマラヤ高所順応レクチャー」高山病対処法」と題して、ヒマラヤ登山の写真を紹介しながら、高所登山における医学的見地からのお話を伺うことができた。医学博士の肩書を持つ国際山岳認定医であるが、ヒマラヤのカラコルム・チベット・ブータン地域や、アフリカ、北米、南米などでも高所登山を経験されている。カラコルムのガッシャーブルムI峰（8035m）のサミッターでもあり、チョモランマやチョ・オユーなど80

00m峰の日中女子合同登山隊の隊長を務め、女性海外登山隊をまとめられた方である。低酸素高所における身体能力について、人体の酸素飽和度に基づく医学的データで分かりやすく説明をしていた。

人間の基礎体力と高所順化能力とは関係なく、高所順化は高所ですら身に付かないが、国内でも常圧低酸素室などの設備があり、高所状態を経験することができる。また、登山時に腹式呼吸をすることで酸素飽和度が改善すること、ゆっくりマイペースでの歩行、水分補給などに心掛けることを指摘された。高山病予防薬（ダイアモックス）を使用する場合は、事前にほかの副作用がないかを確認しておく方が良いとのことである。

海外での高所登山はチームワークが重要であり、できるだけ全員登頂することを信条として登山隊を組織してきたということであった。翌29日は、重廣さん橋本さんとも日帰り山行を希望されていたため、越後の菅名岳（909m）にご案内した。台風の接近であいにく小雨模様であったが、支部関係者も数名同行し、昼ごろに山頂に到着した。重廣さんが現在ライフワークとしている「チャレンジ4000」の計画は、生涯に4000の山に登る取り組みであるとのこと、菅名岳登山もその1つとして記録されたと思う。

本講演会実施に当たり、重廣恒夫副会長と橋本しをり会員には多大なるご協力をいただいた。また、多くの会員からもご助言やご支援をいただき、登山界における日本山岳会の底力を感じた次第であり、感謝申し上げたい。

（桐生恒治）

Climbing&Medicine・81

登山家の呼吸、忍者の呼吸(その3) 睡眠と呼吸

齋藤 繁

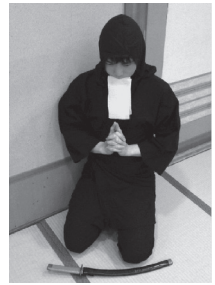
登山中の呼吸に関する話題を忍術書の記述と関連付けてお話しするシリーズ3は「無息忍」についてだ。

山小屋で「いびき」に悩まされた経験をお持ちの方は少なくないだろう。いびきは狭い気道を空気が通るときに周辺の柔らかい組織を震わせることで発生する。首周りの肉付きのよい人、鼻粘膜や咽頭粘膜が炎症やアルコール飲料の影響でむくんでいるときなどに発生しやすく、症状がひどい場合には耳鼻咽喉科や口腔外科の手術対象になることもある。軽症では本人は気付いていないことが多いのだが、睡眠時無呼吸(空気の通過障害と呼吸中枢の変調でときどき呼吸が止まってしまう病気)を生じると、昼間だるい、突然眠ってしまう、などの症状を伴うようになり、本人も異常に気付くことがある。低酸素血症を誘発することから、登山では高山病の重要な危険因子とされる。

敵の城に潜入し、睡眠中の敵の脇から重要な書付を盗み出したり、あるいは敵方の重要人物を暗殺したりすることを生業とした忍者は、睡眠の観察にも余念がなかった。忍術の秘伝書『萬川集海』には睡眠の深さをいびきの状態や外見から推し量るためのコツが記述されている。たとえば、「安楽なる人の鼾はろくに揃い長短大小なく、辛勞の人の鼾はしどろにして行きづまり」などの記載があり、これらの書籍の現代語解説書を出版された中島篤巳氏(医師、剣術家、JAC会員)は、いびきと顔貌の関係、REM睡眠(体の力が完全に抜けているが脳は活動準備に入っている)やnon-REM睡眠(脳が休息する深い眠りの相で、体の緊張度はREM相よりも高い)などの睡眠相が明らかにされ

る、はるか以前からこのような観察を行っていた事実に驚嘆されている(1)。

忍者は敵が狸寝入りではなく、真に深い眠りに入っていることを確認して潜入するわけだが、息がハアハアしては相手を起こしてしまふ。そこで、音の出ない呼吸法を練習し、それを「無息忍」と名付けた(2、3)。練習法は紙を口にくわえて鼻だけで呼吸するものだ。この



忍者は紙を口に挟んで鼻だけの呼吸法「無息忍」を練習したという

シリーズの初回に、登山の登りで呼吸需要が高まると、鼻だけの呼吸では呼吸抵抗が大きいので息がしづらくなり、口も開けて呼吸するようになるという話をした。忍者は城壁や縄梯子の登攀後も口を開けずに呼吸するように努めたわけだ。私たちは防音室の中で、紙を口にくわえて鼻だけで呼吸した場合と、口も開けた呼吸で音の大きさを比べた。安静時にはそれぞれ39~42 dB、39~44 dBとほとんど差はなかったが、1階から5階まで階段を走って往復した後で測定すると、39~46 dB、42~75 dBとなり、鼻だけで呼吸した方が圧倒的に静かなことが分かった。しかし、この程度の運動でも鼻だけの呼吸ではとても苦しく感じられた。忍者は鼻の通りがよほど良かったのか、この程度の運動で息が決して上がることはないように、厳しい修行を重ねたものと想像する。

(群馬大学大学院医学系研究科)

《参考文献》

- 1) 中島篤巳・訳注『完本 萬川集海』(原本:藤林保武『萬川集海』延宝4(1676)年 国立国会図書館内閣文庫蔵) 国書刊行会、東京、2015年
- 2) 黒井宏光 『忍者図鑑』 ベースボールマガジン社、東京、2011年
- 3) The historical ninjutsu research team. "Hattori Hanzo's Ninpiden". Wordclay, Bloomington, 2011.

なお、過去のコラムは次の手順でご覧になれます。ご活用ください。

日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→医療委員会 <http://jac.or.jp/info/iinkai/iinkai.html>

図書受入報告(2018年1月)

著 者	書 名	頁／サイズ	発 行 者	発行年	寄贈／購入別
伊藤薫	八甲田山消された真実	352p/19cm	山と溪谷社	2018	出版社寄贈
雪氷災害調査チーム・他(編)	雪崩教本	144p/21cm	山と溪谷社	2017	出版社寄贈
金澤康夫	雪溪：わが山の画文集	158p/26cm	金澤康夫(私家版)	2017	著者寄贈
出川あずさ・他	山岳ユーザーのための雪崩リスク軽減の手引き (増補改訂)	104p/26cm	東京新聞出版部	2017	出版社寄贈
尾崎功	「東西蝦夷山川地理取調圖」を読む： 20万分の1地勢図との比較	202p/26cm	北海道出版企画センター	2017	高澤光雄氏寄贈
尾形好雄	知られざるシッキムの山々	258p/19cm	日本ヒマラヤ協会	2017	発行者寄贈
原田榮作	シルバー夫婦の「日本百名山」物語	384p/22cm	熊日出版	2018	著者寄贈
越後宏治(編)	世界山岳地図集成：ヒマラヤ編	330p/37cm	学習研究社	1977	Peter Rozell氏寄贈
越後宏治(編)	世界山岳地図集成：カラコルム・ヒンズークシュ編	350p/37cm	学習研究社	1978	Peter Rozell氏寄贈

著者レベッカ・ソルニットは、大学や研究機関に属さない自由な立場から環境、人間と場所、社会変革などをテーマに発言や著作を発表している人ということだ(訳者あとがき)。

著者は80年代に反核活動家として、カリフォルニアからネバダ核実験場へ歩くことで「歩くことの歴史」に目を見開いたという。「歩くことは無数のアマチュアの分野であり、歩行の歴史は人の歴史だ」、「歩くことは人生のミニチュ



2017年7月
左右社刊
四六版 517頁
4500円＋税

ウォークス 歩くことの精神史

レベッカ・ソルニット著
東辻賢治郎訳



図書紹介

「だ」と言い切る。地図も旅行も巡礼も登山も遠足も二足歩行の人類の歴史だともいう(第一章)。まず、米大陸を精神的に歩いた人として、ヘンリー・D・ソローを挙げる。次いで第二章は、ジャン・J・ルソーや哲学者たちの歩きながらの思索、アフリカやチベットなど世界各地の巡礼者の歩行による時間感覚や感性の変化など、広い分野の膨大な文献を引用し、読み下しながら、歩くことが記憶や思考、精神に与える影響を連綿と説いていく。

本書の原タイトル『ワンダーラスト』は、「歩くことへの抑えがたい渴望」というような意味だろう。2001年にペンギンブックスの1冊として刊行されたとのこと。歩くことによって書き続ける著者の体験と論考は、読者に尽きせぬ興味を呼び起こしてくれるが、第七章では、詩人ワーズワースの徒歩旅行熱中ぶりを紹介している。

英国内はもとより、1790年には、革命さなかのフランスへ渡ってアルプス地方、ライン川地方をくまなく歩き通したり、アメリカ大陸の大徒歩旅行もやったり、18万miを歩きながら詩作に励んだ計算になるという。

第八章では、歩く文学者を次々と列伝的に論考している。

また、著者はヨセミテでクライミングに熱中していて、随所にトレイル歩きとともに岩壁登攀のシーンが書かれているが、第九章「未踏の山とめぐりゆく峰」では、ペトラルカの登山と風景の美学に始まって、米大陸の登山史、近代アルプス登山、ヒマラヤ登山の精神的側面を熱く語り、多くの有名登山家を俎上に乗せる。李白、寒山、芭蕉も登場し、日本の修験道と富士登山にも触れている。山やで大好きの人には、この章で引用されている名著は見逃せないだろう。

第十章は、著者が長年親しむシエラネバダ、ヨセミテに多くのペーキングを費やす。米国最大規模のウォーキング(登山)クラブであるシエラクラブの創始者ジョン・ミューアやクラブの活動の歴史と思

の矛盾を指摘していて興味深い。

1857年に英国のアルパインクラブ創立以来、北米とヨーロッパ各地に山岳会やアウトドア活動のクラブが急増したという。ドイツのワンダーフォーゲル運動やボイスカウト運動の歴史や活動にも言及し、山地や原野の所有権の歴史にも話が及ぶ。

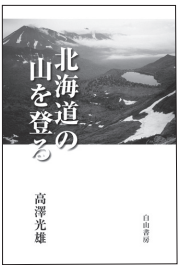
十一章から最終十七章は、山や荒野から離れて、街角の人生、都会の生活者、様々な職業や社会階級ごとの歩行者の行動と思想の考察へと、著者の興味は展開していくのである。

堂々500Pを超える本書の巻末は、注釈と膨大な引用テキストの総覧に22Pも費やされていて、著者の渉獵ぶりと翻訳者の労苦を察することができる。

ゆつくりと静かに味読したい一書である。
(松澤節夫)

高澤光雄著

北海道の山を登る



2017年6月
白山書房刊
四六版 279円
1700円+税

深田久弥と北海道の山



2017年11月
白山書房刊
四六版 215円
1600円+税

著者高澤光雄氏は昭和26年に丸善株式会社札幌支店に入社、平成4年に定年退職するまで図書の世界に身を置き、同時に北海道の山々を登り続けた。図書の販売を通じて加納一郎、伊藤秀五郎、坂本直行といった北海道山岳界の先駆者と面識があり、また今西錦司、深田久弥、望月達夫をはじめ多くの人々とは、山と書物を通じて交流を深めてきた。

日本山書の会、日本山岳文化学会の会員でもあり、既刊の『羊蹄山登山史』『北海道の登山史探求』『北海道登山記録と研究』などで見ると、北海道の登山史に造詣が深いことで知られている。

『北海道の山を登る』はこれまで書きため、雑誌や会報に発表してきた文章の中から、文字どおり北海道の山に関わるものについてまとめたものである。1章「紀行」は「わが青春の山、初めての大雪山」

会員専用の「シカ情報サイト」QRコード



会報1月号9頁に掲載した「シカを見たらスマホで送信!」記事中の、「シカ情報サイト」へのアクセスは、左のQRコードをスマートフォンなどで読み取っていただくと、簡単にアクセスできます。

自然保護委員会

をはじめとして、「日本一美しいカールのある幌尻岳」「心に残るカムイエクウチカウシ山」など比較的古い山行を追想した文章が12編。ここで語られるのは北海道の山と人である。

2章「静かなる山・憧憬の山」はピヤシリ山から乙部岳まで、一般的にあまり知られていない山が24座。この2つの章で本書の大半を占める。どの山の文章を読んでも無味乾燥な案内文や紀行文とひと味違うことは、一読してすぐ分かるであろう。

本書の刊行後、深田久弥に焦点

を当ててまとめたのが『深田久弥と北海道の山』である。深田久弥は昭和33年にジュガール・ヒマールランタン・ヒマールの踏査をして念願のヒマヤ行を実現した。以降、国内では藤島敏男、望月達夫といった親しい山仲間との山行が多くなる。

一方、地域の山岳会などに招かれて講演し、山では手厚いもてなしを受けるという機会も増えた。

深田が釧路山岳会の招きで斜里岳、雄阿寒岳、羅臼岳、後方羊蹄山に登ったのは昭和34年8月であるが、その後しばしば北海道の山を訪れている。この年、朋文堂の『山と高原』誌に「日本百名山」の連載が始まり、その選定に当たっての取材という側面もあった。昭和35年9月、著者は礼文岳、利尻岳などを登るために訪れた深田と初めて会い、礼文岳に同行する。

以後、昭和36年8月の幌尻岳に始まり、40年8月ニペソツ山、42年8月暑寒別岳、南暑寒別岳、43年6月音更山、石狩岳、富良野岳と多くの山に同行した。1章の「深田久弥さんとの同行登山」では、これらの山行の思い出が多くのエピソードを交えて語られており、掲

載した写真は当時の山行の雰囲気伝えてくれている。

2章「深田さんが登られた北海道の山」では、戦前のニセコアンヌプリをはじめ羊蹄山、大雪山、芦別岳について綿密な考証を基に深田の足跡を追っている。

以下3章「深田久弥と北海道」、4章「深田さんに憧れて本州の山に登る」、5章「その他」、6章「追

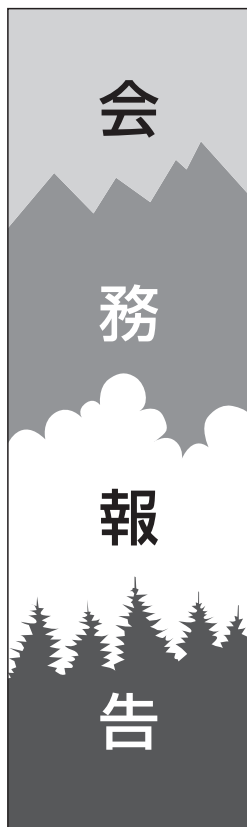
想・年譜」と続くが、ここでは北海道にまつわる深田の関連記事とともに、文学的側面についても言及されている。深田久弥が昭和30年に金沢から上京し、46年に茅ヶ岳で逝くまでわずか16年。思えば北海道に関わった9年間は濃密だったことに、本書を読んで改めて気付かされるのである。

(高辻謙輔)

■1月の理事会は休会でした

ルーム日誌 1月

9日 常務理事会 山岳研究所運営委員会
10日 山行委員会
11日 図書委員会 山岳地理クラブ 九五会
12日 スケッチクラブ
15日 総務委員会 資料映像委員会 スケッチクラブ



16日 財務委員会 フォトクラブ スキークラブ
17日 YOUTH CLUB 三水会 つくも会
18日 みちのり山の会 マウンテンカルチャークラブ
20日 山の自然学研究会 YOUTH CLUB
22日 フォトクラブ
23日 会報編集委員会 デジタルメディア委員会 遭難対策委員会 スキークラブ

24日	自然保護委員会 家族登山普及委員会 麗山会 バックカントリークラブ
25日	改革事業推進委員会 自然保護委員会 学生部 山遊会
29日	青年部
30日	マウンテンカルチャークラブ 平日クラブ
31日	自然保護委員会 会員データ管理システムWG 1月来室者 353名
会員異動	
物故	
竹内満雄	(4480) 17・12・29
近藤 暉	(5258) 17・12・23
井村英明	(5772) 18・1・25
大久保春美	(7249) 18・1・3
茂見 猛	(10528) 18・1・15
波本正司	(12832) 17・12・15
澤村貴和	(14441) 18・1・1
退会	
藤岡知昭	(7105) 岩手
谷口洋一	(8450)
北林幹男	(9046) 信濃
川合 周	(9521) 東京多摩
小笠原義男	(9729) 秋田
松井 茂	(14742)
鈴木洋子	(15841) 東京多摩

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

◆第1回 家族登山教室 「高尾山とテント体験」参加者募集のお知らせ

家族普及委員会

家族が一緒に登る山の楽しさを
知ってもらうために日本山岳会では
登山教室を開催します。第1回
は高尾山の豊かな自然を紹介する
「高尾599ミュージアム」を見学
後、高尾山を登山します。頂上で
昼食後、下山の途中にあるキャン
プ場でテント体験や簡単なおやつ
クッキングを楽しむ計画です。日
本山岳会会員と一緒に登ります。
日時 3月31日(土)午前8時15分
高尾599ミュージアム集
合(午後4時ごろ、JR高尾
駅北口で解散予定)
場所 高尾山と日影沢キャンプ場
内容 家族で登る山の楽しさを知
ってもらうとともに、高尾山
の自然と山道具の使い方を
知る
対象 6歳〜小学6年までの男・

女児とその家族

定員 10家族(定員を超えた場合
は抽選)

参加費 大人1000円、子ども

500円 *交通費は各自、

弁当持参、調理するおやつ

材料は実費を徴収

持ち物 山登りの服装、履き慣れ

た靴、雨具(傘のみは不可)、

弁当、行動食(おやつ)、水筒、

タオル、帽子、筆記用具

申込み締切り 3月19日(月)

申込み・問合せ 飯田邦幸(家族

登山普及委員会)自宅

TEL 03-3268-9654

FAX 090-11990-3508

携帯 090-11990-3508

Eメール idas3268@gmail.com

第1回以降の年間予定

日本山岳会では家族で登る山の
楽しさを知ってもらうための登山
教室を開催します。初めての方も
日本山岳会会員がサポートします

ので安心してご参加ください。教
室は2ヶ月ごとで、年6回の予定
です。この機会に、家族での山登
りの楽しさを味わってみるのはい
かがでしょうか。なお、それぞ
れの教室の詳細は日本山岳会のホ
ムページ、または家族登山普及委
員会までお問合せください。

主催 公益社団法人日本山岳会
〈年間予定〉

第2回 富士山洞窟 6月3日(日)

ヘッドライト、雨具、スパッツ、

ヘルメットなどの道具に慣

れます。

第3回 上高地で一泊体験 7月

28・29日(土・日)夏休み期

間中) 日本山岳会の施設に

宿泊してもらい、上高地の魅

力を満喫できます。

*定員は5家族

第4回 御岳山ロックガーデン

10月21日(日) ケーブルカー利

用で登ります。ロックガーデン

体験もあります。

第5回 高尾山の二丁平で芋煮会

12月2日(日) 山中、大人数で

の調理を全員で体験。

第6回 赤城山2月24日(日) スノ

ーシュー体験や雪合戦など積

雪期の山歩きを学びます。

対象 集場所に家族で来ることで
ができる6歳～小学6年ま
での男・女児とその家族

定員 各回10家族(第3回のみ5家
族。定員を超えた場合は抽選)

参加料 各回大人1000円・子
ども500円 交通費、食費・

その他は実費(第3回のみ大
人2000円、子ども1000

0円、宿泊費そのほかは実費)

申込み締め切り 第1回「高尾山
とテント体験」は3月19日(月)

申込み・問合せ 飯田邦幸(日本
山岳会家族登山普及委員会)

連絡先Ⅱ自宅

TEL 03-3268-9654

携帯 090-11990-3508

✉ idaa3268@gmail.com

◆「第16回東海岳人写真展」開催の ご案内 東海支部

東海支部では、支部員撮影の山
と自然の写真80点以上を展示する
写真展を行います。2年に1回
行なっているこの写真展は、す
でに16回目を数えますが、すべて東
海支部の支部員が国内、海外の山
自然の中で撮影した写真ばかりを
展示しています。名古屋市をはじ
めとする東海地区の一般市民の方

が毎回3000人近く鑑賞に訪れ、
日本山岳会の活動を知ってもら
う良い機会にもなっています。

日時 3月20日(火)～25日(日)9時30
分～18時(最終日は17時まで)

場所 名古屋市民ギャラリー栄名
古屋市中区栄4丁目1番8

号 中区役所朝日生命共同ビ
ル7階

TEL 052-265-0461

展示内容 東海支部員による写真
八十数点

入場料 無料

問合せ 日本山岳会東海支部 写
真展実行委員会

✉ shasin@jactokai.net

◆「第6回小島鳥水祭」案内 四国支部

日時 4月7日(土)10時～20時30分
場所 峰山公園はにわつ子広場
(高松市峰山町)

内容 ①国指定特別名勝「栗林公
園」散策 10時～11時30分 ②

昼食(御接待) 讃岐うどん(讃
岐高松山行会) 12時～13時30

分 ③碑前祭(小島鳥水顕彰碑
前) 14時～15時30分 献花、詩

吟、記念講演会「小島鳥水の長男
小島隼太郎さんについて」(講

師は萩原浩司氏) ④夕食会
18時～20時30分 (会費1万円)

会場Ⅱ喜代美山荘「花樹海」(高
松市西宝町3丁目5番10号

TEL 087-861-5580)

ミニ講演会「小島鳥水とアメリ
カ・シヤスタ山登山」 ⑤日本

百名山「剣山」登山 4月8日(日)
交通費別途、宿泊は営生ロッジ

申込み期限 3月25日
申込み先 四国支部事務局 森
山宏昭

TEL 090-4971-11001

✉ d8gw7un9@384.jp

*宿泊は各自手配のこと。

●2017年12月15日付けで退会
届が出された布目治二(8875)
会員(「山」2018年1月号17ペ
ージ、会員異動退会欄に掲載)は、
本人より撤回の申し出があり、こ
れを認めることとしました。

総務担当理事・永田弘太郎



◆編集後記◆

●先月の本白根山の噴火には、本
当に驚きました。昨年の5月下旬
40人ほどの団体を引率して、ロー
プウェイ山頂駅～本白根山～鏡池
～山頂駅と歩いたばかりだったか
らです。まさに今回の噴火地点の
真上を歩いていたわけで、もしあ
のとき、と思うとぞっとします。

●北アルプスの焼岳をはじめ、北
は知床・硫黄山から南は鹿児島県
三島村の硫黄島、同じくトカラ列
島の中之島と諏訪瀬島のおたけ御
岳まで、「活きている」火山を実感
したことは何回もあります。その
ような山にあえて登るのか避ける
のか、判断は分かれるでしょうが、
個人的には、「活きた教材」を目の
あたりにできることが、温泉の恵み
とともに日本の山の大きな魅力で
はないかと思っています。(節田重節)

日本山岳会会報 山 873号

2018年(平成30年)2月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 小林政志
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社